

【書評・紹介】

小林 實 著 『十勝の森林鉄道—森とともに生きた幻の鉄路を探して』

(中札内, 森林舎, 2012年1月, A5版, 301頁, 頒価2200円:

第2版発売 サッポロ堂書店、春陽堂書店)

石原 誠

1 はじめに

狭義の軽便鉄道とは、明治43(1930)年に交布された「軽便鉄道法」に従って敷設された鉄道のことである。地域開発を推進するために規格の低い小さな鉄道の建設を可能とした同法により、この国の標準軌間である1067mmより幅の狭い鉄道が全国に数多く開業した。しかし、一般的には北海道に存在した簡易軌道、動力車をもたなかった人車軌道および馬車鉄道、乗客を運ばない特殊な鉄道(森林・鉱山・炭鉱軌道ほか)等の、軌間1067mm未満の小さな鉄道を指すことの方が多い。

前置きが長くなったが、本書は十勝に存在した木軌道、馬車鉄道、簡易軌道、森林鉄道などの集大成で、用語の概念把握のため説明を付した。

表紙画像

2 目次

- 第1章 機材搬送の馬鉄・軌道
- 第2章 鉱業・植民軌道ほか
- 第3章 十勝川新水路掘削と築堤工事に使われた軌道
- 第4章 中小河川の工事に活躍した軌道
- 第5章 河川工事とその他に使用された軌道
- 第6章 足寄森林鉄道
- 第7章 陸別・斗満森林鉄道
- 第8章 斗満・音更・十勝上川森林鉄道
- 補録 (1) まぼろしの北海道製糖の軌道2線
- (2) 中村組馬車鉄道と王子専用鉄道
- 資料 『森林鉄道』帯広営林局、1966年3月より転載

3 本書について

「明治26年(1893)、十勝川～(北海道集治監)十勝分監建設地(緑ヶ丘旧刑務所所在地)の間に木軌道(木製レール)を敷設。これが十勝で一番古い軌道」(9頁)と本書は述べる。この木軌道は1904年頃、鉄製レールに変えたようだ(13頁)。

道外を見ても「人車軌道」の一番古くは1891年、静岡県の藤枝焼津間軌道とのこと(『全国軽便鉄道』)。軽便鉄道では伊予鉄道がもっと古く1888年。どうやらわが十勝の分監軌道はこの国での“軌道”の歴史ではかなりの初期に属する。

著者は1927年11月に中札内生まれ。1973年農作業中にトラクターの事故で右腕を切断、一命は取り止めたが、11カ月の闘病生活。その時、1892年発行の地図（標茶付近）の山中に一本の鉄道を発見。それ以来、軌道、鉄道にのめり込み、その16年の成果を『トカッチ』（帯広→現在は音更・春陽堂書店＝静窓書房）に1989～1994年7回にわたり連載。この1～7章に手を加え、更に新稿の8章と補録を加えたのが本書である。

本書は今年1月末に完成。直後インターネット上でかなり情報が飛びかっただけで、神田の「書泉グランデ」さんからすぐ大口注文…。そして2月2日には『レイル・マガジン』名取紀之氏のブログ「編集長敬白」で長文のご紹介をいただいた。その中には「巻末には3頁にわたり参考文献が列記。驚くべきは「趣味書」の類がまったくない点で、わずかに小熊米雄さんの本が目につく程度。一次資料と地元文献を中心にこれだけの著作をまとめられたことに敬意を表するとともに、私たち鉄道趣味の側も、まだまだ未開の地平が切り拓けることを自戒を込めて気付かされた。…書泉グランデさんをお願いして、現在開催中の私の推薦図書コーナーに加えさせていただいた」とあり、ありがたいことだった。交友社の『鉄道ファン』誌も近々紹介記事を掲載して下さる予定で感謝している。

この国には「日本鉄道史」はあっても「日本森林鉄道史」はない。今回森林鉄道関係の本に目を通す機会を得たが、写真集が多く、歴史にふみ込んだものは『<写真集>思い出の木曾森林鉄道』（郷土出版社、1998年）が印象的だった。この本はこの程亡くなった森下定一氏が解説をしていて、氏が木曾の森林鉄道の集大成を待たず一昨年亡くなったことは誠に残念だった。森林鉄道関係の研究書の立ち遅れを率直に認め、一介の農民が努力して著わした著書を、高く評価してくれた名取紀之氏の書評は的確でありがたかった。

「市民の時代」と言われて久しいが市民・町民・村民がプライドを持って、研究者に負けることなくすぐれた著作を出して欲しいが、この地では残念ながら少ない。樺太関係で杉村孝雄さん『樺太<遠景と近景>』1995年、『樺太<暮らしの断層>』2000年の2冊が秀れた民間人の著書だった。

著者はあとがきで「民間人の書いた本書が『北海道森林鉄道史』の展開の一助になればこれにまさる喜びはない」と書いているが、本書はこの分野の書物としては出色のものと思われる。本書の出版を機に各地の森林鉄道の歴史をまとめて欲しいと思う。

「魚つき林」などかねてから“森”の重要性が指摘されてきた。東北大震災・福島原発事故から1年が過ぎ、“がれき”が問題になっている。植物学者の宮脇昭先生は“がれき”で沿岸に堤防をつくり、その上に“木”を植えるというユニークで示唆に富んだ方法を提案している。“森林”については地域史、自然史、鉄道史ほか様々な角度での展開が渴望されている。“森”について、歴史他、多方面で注目されている現在、本書は是非お勧めしたい書物だ。

本書の初版は著者本を除き400部印刷。1月14日発売されたが前述のようにインターネットの活躍（と東京の専門店のご協力）で2カ月を待たずほぼ完売。わたしが距離を置くインターネットの現実の力を、あらためて思い知らされた。急遽400部の第2版をつくったので是非、各方面の方のご一読をお勧めしたい。

附記 小文にあたり高橋滋氏（りんてつ倶楽部代表、横浜市）に各種文献のご教示ほか、色々お世話になりました。

参考文献

岡本憲之

1999 『全国軽便鉄道』JTB、¥1700

沢田節夫 他

1996 『さいはての鉄路〈根室拓殖鉄道の車輛たち〉』モデル8、箕面、16p、¥971

遠山森林鉄道写真集刊行委員会 編

2004 『遠山 森林鉄道と山で働いた人々の記録』南信州新聞社、¥1500（税込）

西 裕之

1997 『木曾谷の森林鉄道』ネコパブリッシング、東京、¥6667

2001 『全国森林鉄道』JTB、¥1400

森下定一 解説

1998 『写真集 思い出の木曾森林鉄道』郷土出版社、松本、¥3800

(いしはら・まこと／サッポロ堂店主)